

旧居留地散歩～史跡

A

旧三菱銀行 柱頭

MapB-1



1929年に建てられた三菱銀行三宮支店(現神戸支店)の柱頭部分が播磨町に残されています。建物の正面玄関にあった獅子のブロンズ像は、神戸ダイヤモンドビルのエントランスホールに移設され当時の風格をいまに伝えています。

B

居留地内の門柱

MapC-2



68番館の門柱はその後の明治15年頃に68番に住んだエッチ・ショニングの住居前にあったものと考えられています。ほかにも旧居留地内には同じ形の門柱が残されており、開港当時の面影をしのばせます。

C

124番の碑

MapD-3



124番が現在の東町、背中合わせの119番が伊藤町です。この2つの土地は税関に近いことから赤レンガの倉庫として使用されていました。第一次世界大戦で外国人商人が引き上げたのち兼松商店が修復した本店の通用門跡が残されています。

D

108番 近藤商店

MapC-2



古い建物のレンガ造りの窓周りが伊藤町に残されています。窓枠には重量を支えるために御影石を三角に組んで載せ、レンガは現在のものよりも薄いものが用いられているのがわかります。下の社名板は昭和8年頃のもので、(2017年2月現在 非公開)

E

居留地の下水道

MapB-3



神戸付近で焼かれたレンガを使った居留地の下水道は、円形管と卵形管が南北道路に沿って6本1880mが敷設されました。近代下水道としては日本で一番古いもので、現在でもその一部が下水道の雨水幹線として使われています。

旧居留地の歴史とその魅力



居留地の風景 C・Bバーナード画(明治11年 神戸市立博物館所蔵)

開港からまちづくり

1858年の日米修好通商条約により、全国で5つの港を開港することが決定しました。神戸旧居留地の歴史はここから始まります。

兵庫開港は1868年。混乱した時代背景で日本人と外国人の争いを避けるために当時の兵庫の市街地から3.5km東の砂地と畑地であった神戸村の、東西は旧生田川と鯉川、南北は旧西国街道と海岸線に囲まれた約500m四方の狭い土地が外国人居留地と定められました。

砂浜だったこの場所は、英国人技師のJ.W.ハートが設計を担当し、街路、街路樹、公園、街灯、下水道などが整備され、126区画の整然とした敷地割り完成しました。現在も居留地の街路は当時のまま残されており、町割りや道路を境界にするのではなく、道沿いに町名をつけるスタイルが継承されています。



神戸外国人居留地(模型 神戸市立博物館所蔵)

当時の英字新聞「The Far East」には「東洋における居留地として最も良く設計された美しい街である」と賞賛されました。なかでも海岸通のブロードウェイは美しい景観で、時折開かれる演奏会のなかをドレスの女性が歩く姿は、まるで名画から抜け出したかのような感じといわれています。

文化を取り込んで発展を続けた街

居留地は貿易・経済の拠点であると同時に、サッカーや牛肉などこれまでの日本にはなかった新しい文化の窓口でもありました。コーヒーやジャズが有名ですが、洋菓子やボウリングなども神戸が発祥の街といわれています。これらも居留地に住む外国人の影響が強かったためといえます。



A.C.シム(中央左から2人目)

居留地の消防隊長であったA.C.シムはスポーツ好きを集めて

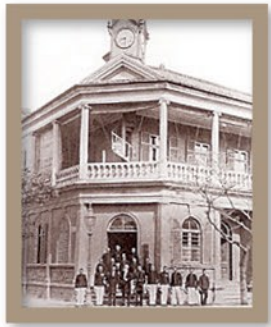
コーベ・レガッタ・アンド・アスレチッククラブ(KRAC)を発足しました。現在も外国人を中心に活動が続いています。彼はラムネ販売で成功をなした人物としても知られています。

居留地の返還と好景気

1899年7月に居留地は日本政府に返還されました。返還後、旧居留地には日本人が入り込み、交通網や港の整備と相まって神戸のビジネスの中心地として発展します。

1914年からの第一次世界大戦で造船ラッシュが起き、港町は好景気にわきました。さらに1923年の関東大震災によって横浜の輸出入品が神戸へ運ばれ、神戸港はますますの発展を遂げます。

そして時代の流れとともに、外国商館は衰退し日本の銀行や商社が次々と近代洋風建築のオフィスビルを建てていきました。



居留地返還式当日の朝 38番居留地行事局

古くて新しいまち「旧居留地」

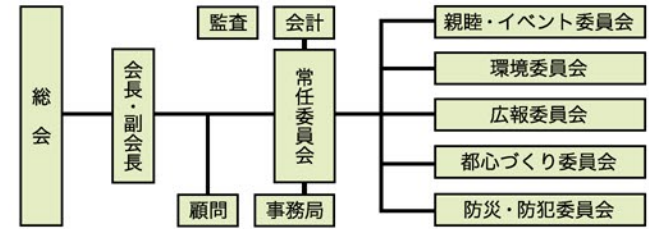
1970年代半ばから、旧居留地内に残されていた近代洋風建築物と歴史的景観が見直されはじめます。近代洋風建築を活用して高級ブランドショップやカフェなどが新たにオープンし、オフィスも増加しました。居留地は歴史的な魅力はそのままに新しいまちに生まれ変わったのです。

現在は、春はオープンカフェ、冬はルミナリエがきらめく、観光スポットであり、地元の人にも愛される「神戸旧居留地」としてのブランドを確立しています。



旧居留地連絡協議会

旧居留地連絡協議会は、地区内で事業を営む法人の集まりで、第二次世界大戦後まもなく設立された歴史をもっています。現在では各種の専門委員会を設け、業種間の壁を越えて会員相互の親睦を図るとともに、地区内のまちづくり活動に積極的に取り組んでいます。



◆親睦・イベント委員会
会員相互の理解を深めるための親睦は、当会の大きな目的の一つです。様々な催しを企画し、ここで働く人達だけでなく、市民や観光客の皆さまにも楽しんでいただいております。

◆環境委員会
クリーン作戦や放置自転車対策など悪いところをなくすだけでなく、飾花活動など良いところを伸ばす視点からの活動も展開しています。

◆広報委員会
広報誌「居留地会誌」を1988年に創刊し、以後、定期的に発行しています。近年ではホームページを管理する他、テーマごとのマップなども編集し、情報発信に努めています。

◆まちづくり委員会
美しい旧居留地の街並みを維持し、一層高質なものにしていくために、各種のガイドラインを策定するとともに、建物の建設や広告物の掲出にあたっての調整を続けています。

◆防災・防犯委員会
大規模災害に見舞われたときの被害を少しでも小さくするための防災計画を策定・管理するとともに、防犯活動等、日々の安全・安心活動にも取り組んでいます。



防災情報

◆AED(心臓救命装置)が必要なときは
AEDは随所のビルに備え付けられています。119番通報とともに、近くのビルに助けを求めてください。

◆津波の発生が予想された時には
山側、JR線以北に避難してください。間にあわない場合は、近くのビルの3階以上に避難してください。

◆地震等の大規模災害時には
旧居留地連絡協議会では、以下のような非常時対応コーナーを設置することとしています。
救護コーナー：けが人等のトリアージをします



情報提供コーナー：減災のための情報を収集・提供します



◆大規模災害時、帰宅が困難な時には
旧居留地内の多くのビルでは、最長、発災から72時間、一時避難環境を提供することとしています。

ユニバーサルデザインのまちづくり

旧居留地連絡協議会では「ユニバーサルデザインのまちづくり」を推進しています。

◆ユニバーサルデザインとは
年齢、性別、文化、身体状況など、人々が持つ様々な個性や違いに関わらず、はじめから誰もが暮らしやすい社会となるよう、まちや建物づくり、ものづくり、しくみづくり、意識づくりなどを行っていかうとする考え方で。

◆まちなかの5人に2人は、何らかの配慮が必要
お年寄りや、子ども、赤ちゃんをつれた人、病気やけがの人、身体が弱い人、不自由な人、外国人など、まちなかの5人に2人は、日常生活を送る上で何らかの配慮が必要な人といえます。地震や津波の災害など、非常時にはその必要性はますます大きくなります。
だれもがお互いを思い合い、心地よく、安心して活動できるまち、そんな姿が理想です。

このマップは街の案内だけでなく、地震や津波などの大規模災害時にも役立つ内容を掲載しています。また色の見え方が一般と異なる人にも正確な情報が伝わるよう、色使いに配慮しています。

神戸旧居留地 思い合いマップ

